



太陽ってどんな星？

宮原ひろ子

新日本出版社 A5判 158頁 定価1,500円＋税

読み物
お薦め度
5
☆☆☆☆☆

本書は小中学生向けの科学読み物である。冒頭のカラーページをめくっていくと、科学衛星がとらえた太陽の画像、皆既日食、オーロラの画像へと続く。ここまではよくあるパターン。ところが、このあとは、屋久島の縄文杉、ケニアでの写真が登場する。「これ、本当に太陽の本？」

また、皆さんは、太陽に限らず、天文学の研究者というどんな姿を思いうかべるだろうか？ 定番は、望遠鏡をのぞく、科学衛星を使って観測する人かもしれない。あるいは、コンピュータで計算する人、観測装置を作る人、と答えるかもしれない。ところが、この本に登場する天文学者（著者）は一風変わっている。屋久島の巨大な杉の年輪を調べたり、南極の昔の氷を調べたり、またはアフリカのケニアの高地に出かけている。さらに、著者は美術大学の先生である。もちろん、美術を教えているわけではなく、太陽の研究者なのだが、本文中にも「実は太陽を観測したことはほとんどありません。」とあり、非常にユニークな研究者像が描かれている。この本では「美大で宇宙」と題するコラムもあり、さりげなく著者の研究の話題やさまざまなエピソードが登場する。

皆さんは「マウンダー極小期」ということばを聞いたことがあるだろうか？ 17世紀後半に太陽黒点がほとんど出なくなって話題になった時期である。この時期は世界のあちこちで寒冷な気候（いわゆる小氷期）が報告されており、太陽活動と地球の気候が何か関係あるのでは？ という議論が始まるきっかけとなった。著者も「マウンダー極小期」に興味を持ち、さらに太陽活動と地球気候の関係に関心を持つようになった。そこで、昔の太陽

活動の情報をする方法が、屋久島の杉であり、南極の氷であり、ケニア調査である。太陽活動と雷のリズムの関係にも着目しており、大変興味深い。

また、最近では、さまざまな国内外の古い文献から、過去の太陽研究を探る研究が活発である。著者自身、弘前藩の200年分の古い日記を見つけ出し、当時の天気事情を調べて、太陽活動との関係を考察している。このように、フィールドワークといい、文献調査といい、著者の非常に学際的な視野が見てとれる。例えば、歌川広重の浮世絵を用いて江戸時代の天気事情を説明する件も大変興味深い。

本書は小中学生向けとあって、非常に平易な表現や言い回しを心がけている。例えば、黒点はしみ、活動周期を脈はくとかリズムと表現している。太陽フレアについては「かんしゃく」と「きまぐれな星」など。太陽活動と地球気候の関係では定番の太陽風や宇宙線や雲との関係もわかりやすく説明されている。ぜひ、学校や科学館の図書室に入れてほしいし、子どもたち相手に読み聞かせをする機会があったら試してみたい。

最後に、本書の最後の方で登場する一節を引用して、本文を締めたい。著者の読者へのメッセージが集約されている一節だと思う。

「太陽の面白いところは、宇宙という遠い世界の話のようでありながら、わたしたちの生活につながっている、というところです。雷が鳴ったときや、とても大きな雲があらわれたときに、この本を思い出して、少しでも宇宙を身近に思ってもらえたらうれしいです。」

矢治健太郎（自然科学研究機構・核融合科学研究所）